

## 高齢者にライフレビューを生起・促進させる質問技法についての一考察

—ライフレビュー面接 5 回法の逐語録の分析から—

○林 智 一

(香川大学教育学部)

## 目 的

Butler(1963)は、高齢者やターミナル期の患者など、死を意識した人に見られる人生の回顧にセラピューティックな意義を見出し、ライフレビューと名付けた。ライフレビューが適応的に進展した場合、高齢期の心理社会的危機である「自我の統合性 対 絶望」(Erikson, 1963)の解決に至る。

筆者は、質問項目をあらかじめ設けず、＜思い出の話聞かせてください＞と伝えて、自発的回顧が生じた際に積極的に関心を示して、回顧を促進するという方法でライフレビューを行ってきた(林, 2012; 2016 など)。これは、質問項目に基づく面接よりも、クライアントの自発性や主体性が尊重され、未解決の人生上の葛藤やテーマが明らかになる方法であると考えられる。

ただし、自発的な想起が生じにくいクライアントや面接場面もありえるため、その際には面接者から適宜、質問も行っている。そこで本研究では、高齢者の 2 事例をもとに、効果的な質問のあり方について検討することを目的とした。

## 方 法

介護老人保健施設に入所中の、認知症やうつ病のない高齢者 2 名に対して、施設内の面接室で週 1 回 50 分のライフレビュー面接を 5 回、行った。事例 A は 88 歳女性、事例 B は 88 歳男性である。

## 結 果

## 1. 事例 A での質問場面の一例

#4 で、話の端緒として面接者から、毎回のよう語られていた幼なじみの話題に水を向けると、その子のおじいさんが江戸時代の生まれでびっくりしたという思い出が語られた。そして、「江戸時代に生まれなくて良かった」と言うので、面接者が＜どうしてですか＞と尋ねた。すると、町民は「切り捨て御免」になるし、昔は医療費も高額で、入水自殺した人もいたが、今は健康保険があつて良いという現状肯定的な話題が語られた。

## 2. 事例 B での質問場面の一例

医師である B さんは、脳梗塞の妻を自分が勤務する施設に入所させ、医師として夫として十数年間の看病の後、看取ったが、#4 で「心のこりが

ある」と言う。面接者が＜具体的にはどういうことですか＞と尋ねると、妻の服薬を管理できなかったことで脳梗塞を招いたのではないかという自責の念や、リハビリを充分させられなかったこと、そして感情的な言葉を何度か投げかけてしまったことが「心のこり」だと語り、落涙された。

## 考 察

## 1. 回顧を生起・促進させるための質問

事例 A で見られたような質問は、通常面接でも一般的なものである。重要と思われる特定の話題に質問というかたちで水を向けることは、①会話の端緒となり、②何を話してよいのか迷っていたり多少の抵抗を有したりするクライアントにある程度の方向づけを行い、③クライアントの主要テーマに焦点化して、④回顧を生起・促進させる効果を持つ。

## 2. 直面化のための質問

事例 B の「心のこり」は、語ることに抵抗を有する可能性もある否定的観念であった。だが、ライフレビューでは肯定的観念と否定的観念の統合が求められる。ときには否定的観念と直面化させるような質問を投げかけることも、回顧を生起・促進させるために有用である。一方、抵抗の強い質問の場合、面接自体を拒否される危険性もある。

## 3. 効果的な質問を行うための留意点

文脈に沿った質問であるかどうかといった内容の適否はもちろんのこと、質問がクライアントに及ぼす影響の度合い、その質問に耐えうるだけのクライアントの心理的健康さ、面接がクライアントの自由に語れる安全な場となるようなラポートや信頼関係の形成の度合いなどを考慮して質問を行う必要がある。また、クライアントの自発性や主体性を損なうことがないように、面接全体の中での質問の分量やタイミングなども検討が必要である。技法としては、開かれた質問を中心とし、確認の必要な点について閉ざされた質問を部分的に用いることが望ましいと考えられる。

【科研費基盤研究(C)17K04424『高齢者のライフレビューが生起するとき一奏功機序の解明と技法論の構築に向けて—』(研究代表: 林 智一)による】